私の研究をひとことで表すとすれば、方法的には宗教社会学的視野からの歴史研究、対象は十六世紀の後半から十七世紀にわたるイギリスのピューリタニズム、それを「近代市民社会」成立史とのかかわりで考察すること、ということになる（そのような視点からの研究を最近『ピューリタニズムと近代市民社会——リチャード・バクスター研究——』『みずす書房』として発表した。以下はその要約であるが、ここでは筆者の問題意識を前面におしだした。紙面の関係でいいたりないことも多いので、同書を参照していただければ幸いである）。といえ、すこしでもイギリスの歴史研究に興味をもったことのある人なら、「一時代前には、はやつたあの問題か」と思われるかもしれない。たしかに、最近はこの問題にかかわる研究者は数すくない。ヨーロッパ「近代市民社会」にたいする「幻滅」が、その主要な原因ということになるだろう。ヨーロッパ近代がうみだした「文化」をトータルに肯定しようとすることには意味がないのももちろんだが、しかし、逆にそ

れをトータルに否定することもナンセンスである。それは、たとえば竹内芳郎氏の最近の著書（『ポストモダンと天皇教の現在』筑摩書房）にも、するどく指摘されているとおりである。むしろ問題は「近代を超えるから」といって、普遍を捨てて特殊を、絶対を捨てて相対主義をとる必要はさらさらなく、むしろ普遍を、むしろ普遍の名に値するまでに普遍化する途を追及すべきだ」といわれている点にあると思う。そして、「そのための不可欠の媒体としてこそ、前近代とか非西欧とかが貴重な意義をもつてくるのだ」ということになる。そのことを私は否定しない。しかし、同時に、「絶対」や「普遍」を媒介にして「市民社会」が成立してくる過程を、

ピューリタニズムと
「近代市民社会」

今 関 恒 夫

西欧にそくして説明しつづけることもまた、「普遍をして真に普遍の名に値するまでに普遍化する途」であるはずである。さて、ピューリタニズムを「近代市民社会」成立史との関連で問題にするという場合、とうぜん「近代市民社会」の定義が必要である。筆者は、自立した諸個人が構成する「ゼクテ」（「信団」の横の連繫として、それをとらえる。そうした視野からみると、「近代市民社会」の成立は、自立した諸個人が、血縁・地縁といった紐帯から解放され、新しい共同体を形成する、経済的・社会的・政治的な変革過程と主体の変革過程との複合態とみることができる。しかし、さしあたっては（経済的・政治的過程が重要でないとか、それに関心がないとかいうのではまったくないが）、社会の変革過程と主体の変革過程の相互浸透が筆者の関心の対象である。

現在の研究水準からすれば、イギリス全体を、いつきよに研究対象にさだめるのは困難である。いくつかの州や主教管区にかなんするこうした視野からの精緻な研究は、

「私の研究」

いまだ緒についたばかりである。しかし、そうした研究にもとづいて、こうはいえそうである。ペーリタニズムが浸透していったのは、地域からいえば森林・牧畜地帯、社会層からすれば中産層である。森林・牧畜地帯は一般に、マナーの紐帯が弱く、教区の面積が広く、したがって、封建的支配層と国教会の上からの統治は強化しにくかった。そこに、「異端」としてのペーリタニズムが入りこんでいく余地があった」と。そして、同じ理由で、絶対王政の経済政策と対抗しつつ、農村地帯に根をはりはじめていた農村毛織物業者とペーリタニとは、選択的親和性をもった。このような諸条件のもとに、ペーリタニたちが、旧来の共同体的絆をたちきつて「信仰共同体」ともいべき交わりをつくりだし、一定の知的（たとえば識字技能）道徳的（規律）資質を前提とする職業労働にたざざわり、地方政治においても中心的役割をはたした場合に、「市民社会」は順調に発展した。

人が確立し、かれらが独自の集団を形成して、その社会的影響力を強化することにより、はじめて可能となる。まさにその点において、ペーリタニズムはいちじるしい力を発揮した。したがって、私の視角からすると、ペーリタニズムの倫理（むしろエトス）と集団形成原理が決定的に重要である。

ペーリタニにとって、人間の行動の目的は、「永遠の憩い」（バクスター）への備えにある。人間の行動の一切は、その目的に焦点がさだめられていなければならない（「超越性」）。そこで、救済へのつよい志向をもちながら、伝統的な地方社会のなかで職業労働にたざざわる一般平信徒にたいして、ペーリタニは、その緊張関係のなかで、神にたいする宗教的義務と世俗的義務をはたすことを要求した。その結果、信仰的理性によって感覚を統御し、日毎のパンと「公共の福祉と多数者のための善」（隣人愛）に奉仕する「天職」としての職業労働に勤勉かつ真正な態度でのぞむような人間類型をうみだし、そうした人々が伝統社会

のなかに新しい信仰集団を形成した。それは一方で、伝統的な教区共同体を破壊し、自由（disciplined liberty）にもとづく新しい共同社会を創出し、他方では「市場」と「市民社会」に、相対的意味で（あるいは「正当性意識」として）、真実と公正という味つけをした。

それが西欧の近代に、ある意味での「特殊性」をあたえ、近代「資本主義」社会に、一方で新しい生産力を付与するとともに、他方でその営利追及に枠をはめ歯止めをかけている。そして、その痕跡は現在でも残っている。集中豪雨的な営利の追及という点において日本が欧米をはるかにしのぐのも、社会主義諸国における最近の変化と混乱もこの「特殊性」の欠如に由来するのである。したがって、この「特殊性」から「普遍性」を洗いだし、それを人類の基本財産とすることがいぜんとして必要だ、と私は考えるのである。

（大学文学部教授）

私の目下の研究上の関心の多くは自然言語、特にドイツ語の、統語上の特性とその意味構造の分析にむけられている。意味論的分析に関心をもつ理由のひとつは、自然言語を使った推論形式の中には、反実仮想文により実現されている推論形式があり、これは通常の論理的推論と異なり、条件節の前後と後件の間に質量含意に基づく真理条件が与えられないような自然言語独自の現象であるからである。

反実仮想文に関した意味レベルと並んで、その形式的な側面についていえば、ドイツ語等の自然言語は反実仮想文の構成に関して独自の統語的・形態論的な規則をもっている。そこで反実仮想文の分析にあたっては、こうした言語現象の意味論的一般化と並んで、個別言語の中に具体的にみられる反実仮想文の生成に関する統語的・形態論的な規則を与えることが重要となる。一般に文にたいする演算子の形式がその文による命題の意味（真理値）の決定に影響を及ぼすということは、個別言語固有の統語的・形態的な個別現象とそれにより

決定され具現化される一般的な意味現象の間に相互に密接な関連があることを示している。例えばドイツ語では、まさに反実仮想文を形成するドイツ語独自の演算子（接統法2式と条件文の組合せ）にたいして少

形式と意味の狭間に

泉尾洋行

しだけ表現を加減すると、その文の意味は反実仮想を含んだ認容となってしまう。

反実仮想文のような言語表現の場合、その表現形式と意味との関係について分析するためには、ある表現の意味を単に別の表現で表示するのではなく、意味をその表現に対する外界の被指示対象物として捉えておくことが必要となる。しかし、このような意味論的にみて基本的な考え方が、自然言語の分析に具体的な妥当性をもって有効に適用されるよ

うになったのは最近であり、そのようになるまでには他の隣接分野の発展を待たねばならなかった。

音声や、語と語の並びのように形をもち感知することができるものとは異なり、意味とはこうした形をもたないので従来の言語理論においては意味研究は音韻論や統語論の発展に比べ後回しにされてきたきらいがある。一九三〇年代からほぼ三〇年間に渡って言語学の主導的勢力となってきた構造主義言語学は、言語現象の研究に際し言語についての直観や内省が回避されるべきであるとし、言語研究の対象として専ら観察可能な事実を取り上げた。自然言語を分析する際にメンタリズムの方法論をとらないうでフィジカリズムの方法論をとるという方法論の立場により彼らは音声学と形態論の領域で成果を納めたが、しかし統語論や、特に意味論の領域ではフィジカリズムの方法論の限界が次第に明らかとなった。この限界は一九五〇年代後半以降、生成（変形）文法として言語学に大きなインパクトを与えながら現在もなお刺激的な成長を続

「私の研究」

けているチョムスキーの言語理論により乗り越えられた。その基本的立場は、もし言語学が言語についての科学たらんとするならば、それは言語についての演繹的な理論でなければならぬとするものであり、先ず言語習得と人間の言語行動の能力という二つの経験的事実についての仮説が打ち立てられ、ついでこの仮説に基づいて言語の現象が説明されるべきであるとした。しかしここでは主として言語の構文に関した現象が扱われ、意味の扱いは構文現象を説明するという目的のための意味表示というレベルにとどまったといえる。

こうした言語分析の方法論的潮流と変遷の中で、六〇年代末から、高階述語論理および内包論理を、自然言語の意味分析に適用するという試みがモンタギューを中心にしてなされた。論理学において使用されている論理式などは、ドイツ語や日本語などの自然言語に対して、人工言語と呼ばれ、既に一世紀近く論理学の分野では論理式的統語論と意味論は確立されてきているが、モンタギュー以前には、人工言語の統語論

と意味論の中に自然言語の統語論と意味論を組み込んで与えることは困難であると考えられてきた。モンタギューは論理学の成果を自然言語の意味論的分析のために導入することに成功し、自然言語の統語構造を与えるのと厳密に平行したやり方で、その意味構造を明示するという形式的枠組みを開発した。彼により自然言語の統語論・意味論と論理言語の統語論・意味論との間の橋渡しがされ、この意味において彼の意味論は言語の意味研究に新しいレベルを持ち込んだのであり、その後の意味研究に重要な影響を及ぼした。

モンタギュー意味論自身の中には、冒頭に述べた反実仮想文の意味論は与えられてはいないが、彼の意味論は、論理学という形式化された体系を基礎にしており、チョムスキーが与えている意味表示に比して、言語表現と被指示対象物の間の関係を明確に形式化している。私は反実仮想文の意味論的分析をモンタギュー意味論の中で扱い、反実仮想の焦点の抽出とその焦点の意味論的抽象化を試みた。反実仮想文など

にみられる人間の言語表現の推論形式の特性の分析の他に、私はドイツ語の構文や形態等の形式の生成に関与する統語的・形態論的な規則の体系化、および、言語表現形式に密接に関連して実現される意味現象に関心をよせている。目下のところ具体的には、実際の文の運用に頻繁に出現する省略形式とその意味特性、語順と意味変化との間の関係等の現象に関心をもっている。

自然言語は人間がこれまでに構築してきた記号体系の中で最も複雑にして精緻を極めたものであり、人間存在の根幹に関わるものであるだけに、今日さまざまな分野から解明の試みがなされている。私はドイツ語の授業を相当しているが、教室で学生諸君が外国語と接する作業により言葉という記号体系の不思議さを意識化することができるように、自らの研究上の研鑽が一助となればと思っている。

(大学商学部助教)

近代日本文学の生成とその行程を考える上に、西欧文化の受容という問題を看過するわけにはいかない。故磯田光一氏はその著「鹿鳴館の系譜」（昭和五八・一〇）文藝春秋刊）のなかで「過去一世紀にわたる日本文学の歩みは、西洋化の波にさらされるながら、風土に根ざした言葉で、それをどう消化するかに力を尽くした歴史であった」としているが、私が専門とする一九二〇～三〇年代の文学状況について生前氏が「プロレタリア文学も新感覚派もモダニズムという一本の幹からでているのですよ」と私に話されたことが思い起こされる。この「モダニズム」を氏は広義に最新の海外思潮という意に用いられていたように記憶している。

昭和という時代の特性をそういう観点で言及する発想を、十年近く前の私は持ちあわせていなかった。それまで勝本清一郎という評論家の、それもプロレタリア評論家としての時代ばかりに拘って細々調べていた私にとっては何か承服し難い、それでいどこか気にかかる言葉であった。専ら傍

証の重要性を第一義に、調べる行為そのものに快楽を見出しつつあった私は、何をしようとしてその対象を扱うのかと氏からつきつけられる想いがしたからである。その後、そこに何故陥っていくのかと袋小路に

近代日本文学の光と影

中川成美

逡巡する結果ともなった。私は自己の関心が真にどう矛先を向けているのかについて問い直さざるを得なくなつたのである。

勝本清一郎について知る人は徐々に少なくなりつつある。また覚えていたとしても北村透谷、尾崎紅葉をはじめとする明治文学の実証的研究者としての方に、その記憶は鮮やかであろう。が、私は彼が本格的にその研究に入る、即ち昭和二年四月下旬、京都検事局の取り調べを受け評論活動を禁止された以降の動向に

はなかなか至らなかつた。その前に彼が翻弄されることとなつたファシズムとの闘いを考えるためには、勝本をめぐる歴史的事実は膨大であつた。その一つ一つを発掘することに私は力を傾けたが、一向にそれらは明瞭な構図を描いてはくれなかつた。しかし、大正リベラリズムの洗礼を受けそこからマルキシズムへと誘われた当時の典型的都市型青年が、弾圧の手を逃れヨーロッパに赴きベルリンやモスコウで日本に向けて活動を展開しナチスの政權掌握を目の当たりにしたことによつて帰国を余儀なくする脈絡を、今一度包括的に日本の現実とパラレルに対応させていってみると、その落差のなかに膨げながら自分が明らかにしたいと希求するものの実体が少しずつ見えてくるような気がした。世界史の息詰るような転回点を同時代的に感知する機会を得た勝本という媒介を通してみると、十五年戦争下のファシズムの浸透とそれへの抵抗がどういうメカニズムをもつて生成されていったのかについて多くの示唆が、彼の行動の随所に隠されている。瑣末なドメスティ

「私の研究」

クな点まで傍証していくエネルギーと同等のそれが、このメカニズムの解明に要求されることを抽象的ながら確認した訳である。そして、その実質を担う西欧と日本の思想の互換性と波及性の問題が新たに私の前に呈上されてきた。

一人の文学者を追い続けるはずがこんな状況に追い込まれてから、言い様がなくて一九二〇～三〇年代を調べていますなど専門を説明したりしている。がその実、日本にあつても世界にあつても変換を迫られたこの時代を辿ってみたいというブリミイティブな意志が、現在その期の渡欧作家や作品を雑多に採りあげさせることになつてしまった。先の気の遠くなるような道なりに改めて自分の力の限界をまざまざと思ひ知り、また文学研究から逸脱しそうな危惧も抱いていないではない。しかし、国際政治の緊張や、メディア・交通の発達などといった事象が、文学者が文学を生み出す過程にいかに大きく関わっているかをおよそ文学に遠い外務省外交史料館や交通博物館の資料から教えられる時、文学が個の人

間の営為という側面を超えて我々の意識を喚起する、あるいは構築する要素として提出されているのだと、自分に言い聞かせることにしている。そんな試行錯誤を繰り返しながら、研究の目処など立たないことは言うまでもない。果てない混沌に右往左往しているのが現状である。

最近、日中戦争下の旧満洲、中国東北部を巡る文学者従軍記、視察紀行文を調べる機会に恵まれた。一九三〇年前後、欧米へと吸い寄せられた多くの作家・評論家が今度是中国へ、また四〇年代には東南アジアへとその足跡を伸ばしていく経緯を追っていくうちに、この異質な海外体験を通じて彼等のメンタリイティーについて考えさせられた。自由・繁栄・進歩・文明への脱出口を表象していた西欧のコードが、閉塞・未開のコードを担わされていたアジアへ向けて巧みにすり替えられ、見果てぬ幻影の大地にアナライズされていく様は、日本の知識人が等しく持った悲劇性を表わして我々を責めたてる。どちらのメンタリティーに正否があるかということではなく、

日本人が西欧文化をどう咀嚼し、どう受容し、またどう認識していったかを解明していくにはアジアからの視点の導入は不可欠のことと思う。こうして一つのことを青息吐息で終える度に新たな問題を抱えこみ、また勉強は迂遠な道に迷いこむ。ヨーロッパやアジアに刻印された日本人をめぐる膨大な意識の記録を、文学を手懸かりに読み解くなどという遠大な夢が叶うとは考えられない。が、調査旅行の途上に出会った様々な国の人たちの援けや励まし、或いは批判や告発を自己の内部に響かせて、ささやかな歩みを刻んで行きたいと願っている。

(女子大学専任講師)

ここに代表的なイタリア・ルネサンス詩人トルクワート・タッソー(Torquato Tasso, 1544-95)の叙事詩『イエルサレム解放』(*La Gerusalemme liberata*)の冒頭の一部を紹介させていた²⁴。

詩神よ、あなたはヘリコンの泉のほとりでかれゆく月桂樹でひたいを飾るとなく、永久に輝く星の冠を頭に頂き、きらめく天使らが和して歌う天上に座したまう。どうか私の胸にその神々しい息吹を吹き込み、私の歌に光を照らしたまえ。もしも真実にいっわりの飾りを施し、あなたから受ける以外の他の喜びでこの書物を飾ったとしてもどうか許したまえ。(第一巻第二節)

これは叙事詩共通に見られる詩神に対する常套的な祈願すなわちインヴォケイションである。ただし古典叙事詩のそれとは違い、詩神(ムーサ)の名を借りて創造神である神に対する祈願であるところにルネサンス叙事詩人の立場がよく窺える。詩人は神と類似の力、創造に係わる神性な力を有するとする当時の考え方が反映されたものであ

る。さらに注意すべきは、ルネサンス詩学の根本的な特質ともいえるアポロギア(弁明)のトーンがこの祈願の後半部を占めていることである。実はこの弁明の背景にはルネサンス叙事詩論の一つの大きな争点があ

ルネサンス叙事詩と叙事詩論
—その展開と背景をめぐって—

清水 宏

介在しているのである。

ではタッソーを軸とするルネサンス叙事詩の成立事情とその背景となる叙事詩論の展開をここで概観してみたい。これが目下の研究課題でもある。

ルネサンス叙事詩の成立を『ローランの歌』に代表されるシャルルマーニュ武勲詩や『トリスタンとイゾルデ』に代表されるブルターニュ物語詩といった中世ロマンズに見ることは定説である。前者はいわば英雄讃歌を基調とした崇高詩とすれば

後者は冒険と恋愛に加えて魔術・呪縛の世界を存分に展開させる物語詩といえる。両者合わせもつ中世の騎士物語の伝承が十五世紀末から十六世紀全般にかけてイベリア半島、イタリア半島、さらにヨーロッパ全土へとその広がりをみせる。スペインのモントルヴォによる『アマデイス物語』、イタリアのブルチによる『モルガンテ』、ポイアルドの『恋するオルランド』、アリオストの『狂気のオルランド』、さらにイギリスのスペンサーによる『妖精の女王』等がこの例である。

これら騎士道ロマンスの最大の特徴は『遍歴の騎士』(Knight-errant)に象徴されるように冒険と恋によるプロットの逸脱・脱線に見られる。信仰と騎士道精神の本道から外れた官能と逸楽の世界がより民衆に迎合するに至る。とりわけアリオストの『狂気のオルランド』(1516-32)がタッソーの時代のフェララーを中心とする諸都市を席卷し、民衆を魅了した。

こんな時代風潮の中でタッソーは父親ペルナードのロマンス『アマード』に触

発され、若くから理想とする叙事詩の制作に着手した。しかしアリオストの時代とは異なり、新たな古典叙事詩の復興の気運が高まっており、『イリアッド』、『アエネイス』のイタリア語翻訳が十六世紀に盛んとなっていた。また、それらを模範とする叙事詩制作が實際詩人の手でなされたのである。トリツシーノの英雄叙事詩『イタリア解放』やロンサルールの『フランシアド』等が代表的な例といえる。

さらに古典叙事詩の隆盛の気運を高めた他の要因として、アリストテレスの『詩学』やホラティウスの『詩論』の紹介と翻訳、それに基づくルネサンス詩学の成立と発展、論争を挙げることができる。

これら『詩学』論争の隆盛に加えて、ルネサンス叙事詩を始めとする当代の文学の方向付けに少なからぬ影響を及ぼした現象として十六世紀半の反宗教改革運動がある。トレント宗教会議の再開(1562~3)やジェズイット教団の創設(1564)を契機とする肅清運動・宗教裁判による異端者弾圧・焚書目録の作成といった外的圧力が詩

人の創作活動をより厳しく制約し始めたのである。

このような状況において冒頭のタツソーの祈願がなされたのである。彼の理想とする叙事詩は古典叙事詩と中世ロマンスの融合された「多様性の中の統一」(*varietà in unita*)の取れた叙事詩であった。リナルドに代表される遍歴の騎士を挿入しながらも、またクロリндаやタンクレディの甘美なエピソードを挿入しながらも、ゴツフレード指揮の第一回十字軍による聖地イエルサレム解放を高々と歌った英雄叙事詩を三十年有余を費して完成させた。まず百十六のスタンザからなる写本が『ジェルサレツメ』(1559-1560)の名で書かれた。さらに『リナルド』(1562)が出版された。その後二十年して『ゴツフレード』(1580)と改題され、翌年現在の題名の叙事詩がフェララにて出版されたのである。そして彼の『詩学論議』(1587)が世に送られ、反宗教改革運動の風潮に合った宗教色を濃くした叙事詩論が展開されたのである。ここにいわゆる『アリオスト―タツソー論争』が展

開されていく。アリオスト派の主張はアリストテレスの『詩学』から独立した詩論の展開であり、タツソー派はあくまでも統一性を主軸とするアリストテレスに依拠した詩論を展開する。いわば近代派と古典派の論争であった。タツソーはさらに自らの叙事詩を『征服されたイエルサレム』(1593)と改題し、前作の民衆の興味におもねるエピソードを削除した。この事を弁護するかのように翌年『英雄叙事詩論』を世に出し、前作の詩論を手直し、キリスト教信仰に基づく詩論の色合いをますます濃くしたのである。これは十六世紀後半からの文学の流れを変える一要因ともなった。すなわち、聖書に題材を取る叙事詩の隆盛を見る気運が出来上つたのである。タツソーの『世界創造』(1594)、デュバルタスの『聖週間』(1578)、さらにミルトンの『失樂園』(1674)とその流れは十七世紀へと続くのである。

(女子大学助教授)